



幸子の幸　　く故郷（ふるさと）に抱かれて

C 17 伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する態度

【主題名】 大きな故郷（ふるさと）

【ねらい】 いとこのマリアさんと較べて、自分の環境や自分自身に目を向けない幸子。しかし、マリアさんの言葉から、故郷の大切さやすばらしさに気づき、前向きに生きようとする幸子の気持ちを考えることを通して、日本の文化や伝統、故郷を愛する心情を育てる。

いよいよ今日からいこのマリアさんがバンクーバーから私の住む町にやってくる。

「マリアちゃん、またきれいになったでしょうねえ。」

「お母さんがフランスの人だもんね。」

「一昨年のお母さんの葬儀以来だけど、元気にしていたかしら。」

「しっかりとしてるからね。幸子より三っしか年が離れてないのにな。」

マリアさんのお父さんは私の父の弟である。カナダで日本料理店を経営しているバリバリの国際人だ。若いころから料理人として海外で修業をし、パリの店で知り合った女性と結婚した。お店を切り盛りしながらマリアさんを育てていたそのお母さんが、突然病気で亡くなったのが二年前だ。



「さっちゃん、久しぶり。今年小学校卒業だよね？」

ブランドの服を着こなしたマリアさんが大きな荷物をもって我が家に到着した。洗練されたファッション感覚とモデルのような容姿のマリアさんは私の憧れだ。

「ああ、おばさんが淹れてくれるお茶すごくおいしい！毎日こんなおいしいお茶飲めるなんて、さっちゃん幸せだよ。」

張りのあるマリアさんの声が響く。

「そうだ、明日、夏祭りでしょ？たこ焼き屋さんあるよね。とうもろこしも付き合っかね、さっちゃん。」

「エー？マリアさんにたこ焼きは似合わないよー。」

「せっかくマリアちゃんが来たんだから、お寿司でもとろうと思ってたんだよ。」

「おばあちゃんの肉じゃがと、おばさんのなすとみょうがのてんぷらが食べたい。」

「マリアちゃんのリクエストなら、腕によりをかけないかね。」

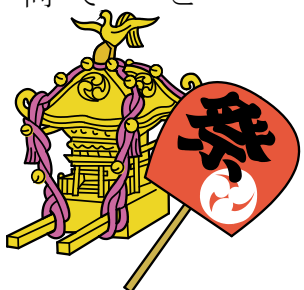
「ワンワン」

おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、豆柴のハナまで一緒になって賑や

かな会話が続いた。

「祭りは毎年、町内各地から山車や神輿が繰り出して、この町にこんな人がいたつけ・・・というほどの賑わいになる。」

私とマリアさんは、祖母に浴衣を着せてもらって祭りに出かけて行つた。すれ違う人たちは、間違いなく100%マリアさんに視線を向ける。



幼なじみの文也、裕司、宗太たちがいつものように大騒ぎしながらこちらに向かってくるのが見えた。

「よう、幸子。お前、モデルと知り合いなの？」

「文也も知ってるでしょう？いとこのマリアさんだよ。」

「ウソだろう？ぜんぜん似てないじゃん。」

「美人さんに、たこ焼きなんか持たせちゃダメでしょう。」

「お供が荷物持ちしなきゃ。」

「アハハハ、じゃあな、ダサ子のさっちゃん！」

おむつをしている頃から兄妹のように育つた三人の口の悪さには慣れっこだ。いつも「うるさい！」なんて言いながら、教室中を追いかけていく私だったけど・・・なんで？・・・くらくらと目まいに襲われ、私はマリアさんのか細い腕にしがみついて立っているのがやっとだった。ごろごろごろ・・・マリアさんの手からたこ焼きが地面に転がった。

翌朝早く、マリアさんとハナの散歩に出かけた。

「おはよう、さっちゃん。今日は早いわね。ハナちゃん、お散歩いいねえ。」

ハナは、話しかけてきたおばさんにしっぽを振って甘えている。

「おはよう。」

いつも青いバンダナを巻いてジョギングしているおじさんが横を通り過ぎた。

「さっちゃん、昨日は、私、あの男の子たちに何も言えなくてごめんね。」

「いいの、いいの。あいつらいつもああやって意地悪なこと言うんだよ。いつもなら、追いかけて行ってボコボコにするんだけど。なんか、昨日はちよつと元気なくなっちゃって。」

「あの子たち、何度もさっちゃんのこと振り返ってた。ホントは謝りたかったんじゃないかな。」

「謝ることじゃないよ。だって文也たちが言ったこと本当のことじゃん。マリアさんは、茶髪で色白ですごくきれい。私なんて、髪は真っ黒だし背だつて低い。いとこ同士なのにぜんぜん似てない。からかわれてもしようがないよ。あーあ、せめて、名前だけ

でも、『悠菜』とか『美優』とかおしゃれな名前にしてほしかったよ。」

三・四年前の低学年の時だったと思う。やはり名前のことで友達からかわれたことがあった。

『幸子』だって、古臭い名前。ダサイなあ。」

私はくやしくて家に帰って泣きながら母に訴えた。

『幸子』のどこが悪いの？誰にでも愛されるやさしい子になってほしい、この世界のだれよりも幸せになってほしい・・・お父さんと、おじいちゃんもおばあちゃんも心から願って付けた素敵な名前じゃないの。」

母は、最初は悲しそうな顔をしたが、必死に言葉を探しながら、

「おじいちゃんのおばあちゃんが、『幸』っていう名前だね。それはそれはべっぴんさんで、村中の評判だったんだって。だから、おじいちゃんが絶対『幸子』がいいって。それに、『愛』とか『心』とか『幸』って日本人がとても大切にしている美しい言葉なの。幸子もいつか自分の名前を誇りに思うはずよ。」

そう言い切ると、大きく頷いて笑顔を見せた。その母の顔を、私は思い出していた。

『さっちゃん、さっちゃん』ってみんなが親しみをもって呼びかける

『幸子』っていう名前、明るくて元気なさっちゃんにピッタリで・・・私は大好きだよ。

黒くてツヤツヤの髪もすごくきれい。バンクーバーの友達にさっちゃんの写真を見せると、『日本人形みたい。神秘的な美しさを感じる。』ってすごい人気なんだよ。」

く誰もが振り返るカッコいいマリアさんがそんなこと言ったって説得力ないよ。くそう言おうとして私は言葉を飲み込んだ。マリアさんの大きな瞳から、透き通るような頬を涙が滑り落ちているのを見てしまったからだ。

「さっちゃんには故郷がある。愛でいっぱい居場所だよ。」

少し間をおいてからマリアさんは続けた。

「おじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん、ハナも、みんな、さっちゃんのことをとても大事に思ってる。さっちゃんの家のおいしいお茶や、ご飯・・・家族の味、なつかしい味がする。この間『さっちゃんって幸せだね』って言ったでしょ。私、いつもそう思ってたよ。おじいちゃんそのまたおじいちゃんの昔からあの家で暮らしていた人たちの幸せが今もずっと引き継がれている。長い歴史の中を生きていた人たちがさっちゃんを見守ってくれているんだよ。」

私は、マリアさんの横顔を見つめた。そして、お母さんが亡くなった今、たった一人



の肉親であるお父さんと、遠い海外で頑張って生きているマリアさんの事を思った。

深呼吸をしてマリアさんは空を見上げた。

「春に咲き誇る桜、新緑の深い緑、夏には暑い日差しの中、響き渡るお祭りの笛や太鼓の音色、秋は神社の銀杏の見事な紅葉、冬の晴れた日にくっきりと見える富士山・・・日本の美しさや伝統を大切にしている人たちが暮らしている、素晴らしい町に住んでいるんだよ、さっちゃんは。」

小さい頃から、パパの仕事でいろいろな国、様々な町を転々として、私には『故郷』と呼べる場所がないんだなあと思って思ってた。でも、日本に来て、さっちゃんの家で過ごしていると、何ともいえない家の香りに癒されて、ホッとしている自分に気づいたんだ。私の体の中に流れている日本人の血を感じたの。込み上げてくる温かさ、この、安心感が『故郷』というものなんだなあって。」

「いつも寄り添って私を応援してくれる家族がいて、声をかけてくれる近所の人たちがいる。そして、口の悪い、でも愛おしい幼なじみがいて・・・故郷のぬくもりが人の心をつなげてくれていたのかなあ。」

「家族との毎日 変わらぬ日々、目の前に広がる茶畑や山の景色、見慣れた家並み、優しさがあふれる人たちとの触れ合い・・・この平穏な日々、それが幸せというものなの？」

「どのくらい時間が経っただろうか。木々の葉がサラサラサラと音を立てた。夏の蒼い風が体を包み込み、大きな大きな故郷に抱かれている心地よさを感じた。」



「ワツワン」ハナが突然鳴いた。

「ハナ、今、『さっちゃん』って言ったよね。」

「うん。私もそう聞こえた！」

「お腹すいたね。そろそろ帰ろうか。」

「朝ごはんは、納豆と卵焼き！」

「マリアさんってば食べ物のことばかり！」

私たちは手をつないで家へと急いだ。



作

瑞穂町教育委員会

【発問例】

- ① 「ホントは謝りたかったんじゃないかな。」というマリアさんの言葉を聞いて、幸子はどんなことを思ったでしょうか。
- ② 木々の葉のサラサラという音を聞きながら、幸子はどんなことを考えていたでしょうか。
- ③ 本日の授業で学習したことを通して、日本の文化や伝統、自分の育った町のよさについて考えたことを書きましょう。